

國民文學建設の曙光を翹望す

谷 龍 之 助

(一)吾人の見解……………(二)理想と現實……………(三)民衆の狀態……………

(四)宗教文藝の士を抹殺す……………(五)吾人の將來……………(六)吾人の所謂國民文學

(七)最後の要求……………

(一)

轟立幾萬幾千丈、忽焉鳴動し來つて雲煙天日を蔽ひ、紅熱の熔岩雨の如くに降る、仰ぎ見るもの、唯だ茫然として自失するのみ、夫れ唯だ自失す、靈怪崇美の體現は、見て思ふこと能はず、聞いて語ること能はず、止む無くむば滿身の力を込めて、「嗚呼」の嘆聲を發するに過ぎず、此の一語にして、彼等が現實の活劇に對する見解と批判とは盡きたる也、何の餘裕ありてか、よく大宇宙の權威を説き、神秘を傳ふることを得むや。此の時に當りて獨り廓然として悟り、綽然として思ひ、悠然として學ぶところあり、以て自然の消息を解し得て、之れを人生の意義に投合せしめ、調和せしむるもの、或は神人の交渉を叫び、人間の驚異を述べ、天地の生命を描かむとして、發して教義たり、詩歌たり、繪畫たらしむるものは、實に是れ遙かに凡俗を抜いて精靈の先覺者たる、宗教家たり、詩人たり、藝術家たらざるべからざる也、然り大宗教育家たり、大詩人たり、大藝術家たるべき也。「吾れ思考す、故に吾れ在り」、凡俗の子吾れ在る能はざる時に當り、獨り泰然として吾れ在り、時流の人色彩をのみ觀過して些の思考なきに際し、よく實在の考察を廻らす、斯くの如くにして精靈

の覇權は常に彼等の掌中にありて、一代の思潮その赴くべきを導き、久遠の理想その歸すべきを示す、故に曰く信仰は一切なり、詩は人生の批評なり、藝術は慰安の歸趣なりと、人生の慰安と批評と一切とを司るもの之前には、絶大の靈怪も崇美も、総て思索の範疇に拉し去らる、彼等は常に在り、以て吾れを失ひたる現世の人は、忽ちにして復た吾れを得ることを得む。吾人は斯く解し來つて眞に偉大なる宗教家たり、詩人たり、藝術家たるものに向つて、無限の敬慕を捧ぐると共に、若し彼等を有するを得ば、國民の幸福と光榮とは、誠に云ふべからざるものあるを切思せざるを得ざる也。

(二)

説を爲すものあり、大山破裂して人或は驚殺せらるることあるも、須臾にして雲煙散じ、熔岩收まるるに至らば、人は忽ち自から蘇生して曩きの光景を追想し、之れを口にするを得、之れを筆にするを得べし、發して詩となり畫となる思ひの儘なり、何ぞ必ずしも宗教家詩人藝術家を要せむと。一山の破裂は未だ小なり、若夫れ山動き海鳴り、黒風白雨、乾坤一擲の大破壊に遇はゞ即ち如何、人はその破壊の止むと共に忽ち覺醒して、敗迹殘墟によりて、よく過去と將來とを考慮するを得べきや、之れ或はその能くする所ならむも、然かも瘡痕の民、疲弊の衆は、遂に前途の光明を認むる能はざる也、人生の歸趣を捕ふる能はざる也、一國の理想は亡洋として見るべからざるに至らむ也、斯くの如きは古今東西の史乘が、屢々吾人に例證するところ、又疑ふべからざる也。是に於て乎説

を爲すもの嘆して曰く、貴意は寔に之れを諒すれども、悲しい哉、その所謂大宗敎家大詩人大藝術家なるもの、抑も幾人かありて吾人の要求を充たすものあるべき、偶々天才と稱せらるるものと出づるあるも、空しく一代の人心に背馳して、却つて人世を無視するが如きものあるにあらずや、得難きを説くこと何ぞ夫れ爾かく急なるや、希くば猶ほ詳らかに聞くことを得む乎と。謂へらく吾れは理想に驅られ要求に走せて、現實を忘れたり、彼れは現實に執して、理想を抛ち要求を棄てたり、彼我の論共にその立脚を異にす、説いて益々その軌を逸せむ、然れども吾れは理想に生き要求に動くと共に、又その之れを實現せしむるの努力に於て欲陷なきを欲するもの、豈に現實の不足に泣いて以て徒らに煩悶展轉すべけむや、實現せしむるの努力とは何ぞ、即ちこの一篇の主旨にして、所謂大宗敎家大詩人大藝術家の出現を促すの道を講ずるに於て、遺憾無きを欲する所以なり、

(三)

譬へむか、未だ乾坤一擲の大破壊にあらざるも、幾多の大山鳴動し來り破裂し去る怪詭異常の活劇は、近く吾人の頭上に墮下したりき、飛耳以て聞き、張目以て觀たりと雖も、啞然として口云ふ能はず、蕭然として心思ふ能はず、滿腔の精力を以て辛うしてその感想を洩らしたるもの、徹頭徹尾、唯だ「萬歲」の一句ありしのみ、陷落擊沈みな萬歲なりき、國債募集上下協戮すべて萬歲なりき、斯くて彼等は萬歲以外に於て云ふ能はず、語る能はず、傳ふる能はず、叫ぶ能はざりしは、即ち是れ思考なきが爲めなりき、默想なきが爲めなりき、やがて是れ自己の存在をすら忘れたりしものに

非ずして何ぞや、斯くて熱火の裡吾れを失ひたりし五千萬の民衆が、醒めて再び吾れを認めし時は、四邊唯だ灰燼の焦土と化したりき、日露戦争即ち是れ也。

聞く感激の極は沈黙なりと、思考なき沈黙の極は無意義に終るか、然らずむば無意識の發聲となる、無意識發聲の連呼は、遂には外界の刺激となりて、翻つて意識を要し來ることあり、試みに僅かに眠れるが如く死せるが如く沈黙せむよりは、一夜滿天の星光を仰いで、火山の絶頂に猛虎一聲の大音を發せよ、反響曼然として頭腦を擲らば、此の時何物か來りて我が衷心の感應を喚起すべき也、斯くて思考の源泉となり、吾が存在の認識とならむ。感奮激勵の極、一齊に起ちて猛進せし大和民族は、意氣揚々、却つて己れを忘れて無意識に發聲せし萬歳の反響に動搖せられて、須臾にして俄然感應を得たり、意識を要し、思考を用ゆるに至りしもの、寧ろ自然の數たるべかりき、然れども時既に遲かりき、紅蓮の焰散じて迹なし、熔岩の流潜みて聲なきを如何せむ。

今や目を刮し耳を聳て、曩きの光景を追想すること、縷々たり、綿々たり、思索の花蕾將に春光に浴せむとす、忘られたりし大和民族の存在、茲に再び確立せられむとはすなりけり。さあれ好機逸し易く、新たに醒めたるもの、目は猶ほ未だ朦朧たるを免れざる也、知らず、此の好機をして光輝たらしめ、鮮やかに眼孔を擴大せしめて、民族永遠の進路を照らすもの、果して誰ぞ。

(四)

民衆勝ちて酔ひ、驚いて黙するの時、一代の風潮は渾沌として中有に迷ふ、吾れ無きものには社會

なく、國家なく、况んや人生なし、人生無くして何の萬歳ぞ、何の凱歌ぞ、此の時に當りて凱歌と萬歳とに意義あらしめ、國家と社會とに生命あらしめ、而して更に人生に光明あらしむるものは、實に人生の批評と慰安と兼ねて一切とを根蒂より闡明し來る福音に俟たざるべからざりし也。刻々潮し來る萬山の烈火に、民衆の靈火は影を潜めて、螢光よりも小なりき、よし螢光たりきと雖もよく天上の星宿を摩するを得せしむるものは、實に之れ宗教家詩人藝術家が五采の光耀を以て導くに期待すべかりし也。何等の恨事ぞ、彼等は自から許すに現世を超絶せるを以てし、洒然として揚言して曰く、心靈の問題は爾かく容易ならず、馳せて血戦するが如く、進んで納税するが如く、務めて説き、奮つて歌ひ、辛うじて描くは吾れ等が事にあらざる也、若し夫れ絶大の神興に遇はば、即ち奕々無限の精彩を發して、堂々として民衆を督勵せむのみと。然かも所謂宗教家は名譽の戦死を讚美して、葬儀に列するを得ば以て足れりとし、所謂詩人は紛々たる軍歌の兒童走卒の口の上るあらば、以て能事了れりとなし、所謂藝術家は一幅戦場の光景を描き、一箇軍人の立像を刻みて、以て天賦を全うせりとなす、時世を超絶せりと云ふは、人生を洞察する能はざるの遁辭に過ぎず、彼の戦争文學を云爲して卑俗の好尚に投ずるものゝ如きは、巧言自から掩はむとして却つて醜態を曝露せるに過ぎざる也、詮じ來れば兩者共に精靈の先覺者たるべき自覺なき也、權能なき也、資質なき也、空しく民衆と共に驚殺せられてかすかに萬歳を叫ぶの外、何の思考なく、存在なかりし也、吾人は彼等の無能を咎め、無力を笑はむには、餘りに聰明に過ぐ、唯だ彼等の存在を抹殺せむと欲する也、嗚呼大山破壊して一つの慰安批評信仰を興ふるもの無し、民衆の混乱驚倒、夫れ自明の

理に非ずや。

民衆と共に驚殺せられし彼等は、今や國民と共に蘇生したり、左顧右盼して四面の光景を想ふの時、指導せむよりも寧ろ使役せられし觀ある彼等は、自から省みてその小なるを悟らずや、宗教家、詩人、藝術家の名は遂に空辭に過ぎざりしを思はずや、自己の小なるを覺るはやがて大なるの第一歩なり、今や彼等再び起つて新興の氣運に投せむとするに當り、抑も如何の懷抱するところありや、乞ふ虚心坦懷、試みに吾人が披歷するところを承けむ乎。

(五)

物心兩界の交通は、総て大なる危機に促されて躍動す、内在の火焰は發して物質的戦争となり、外界の熱湯は徹して精神的革命となる、心靈の革命は物質の戦争を豫想し、物質の戦争は屢々心靈的革命の前驅をなす、革新文學は開いて佛の革命となり、普佛戦争は結んで帝國の建設となる、五千萬民衆の危機が破れて外界の戦争たりし間は、内在の火焰は一抹の淡煙だに擧げざりしも、今や然らず、將に黒烟を捲いて轟然、昊天を衝かむの慨あり、あらざるべからざる也、戦後心靈の革命とは何ぞや、交番の焼打にあらず、内閣の交迭にあらず、大使館の設置にあらず、實に是れ精神的帝國の新建設にあり、心靈的存在の新確認にあり、所謂「古き搖籃の夢より醒めて、新しき世界の大國民(形式のみにあらず)となる」にあり。吾れ嘗て大國民なるものゝ意義を論じて云へる事ありき、「居は志を移すと、これ小人物に向つて云ふべき也、戦争は以て萬事を律すべしと、これ小國民に

向つて云ふべき也、居の如何に關せず、戰爭の有無に關せず、常に一大理想を維持してこれに直進するもの、これを個人としては大人物と云ひ、これを國民としては大國民と云ふ、(中略)、理想の大なるどころ、そこに必ずや時間空間の兩界に跨りて一大事業は發展せらる、その精神的に於て物質的に於て、更に現今の一元論より見て、吾人は精神的に大なると共に亦物質的に大ならざるべからず、然りこれ即ち眞の大なり、國民としてこれを大國民と稱せむ哉」と、物心兩界の交渉は既に述べたり。今や吾人が所謂一大理想とは何ぞや、曰く、日本思想を確立して、世界民衆の全精神界を統率し、自からその王位に坐するにあり、彼の希臘思想と云ひ、印度思想と云ひ、將た又支那思想と云ふが如きをして、肅然として只一日本思想の足下に拜服せしむるにあり、この一大氣魄を以て廣く宇宙の大勢を通覽して、堂々の歩武を進むるあらむか、吾人民族存在の意義は夫れ九鼎大呂の重きにあらむ、而してこれ疑も無く大國民として、人生の慰安と批判と一切とを司る終局の歸決に外ならざる也、國民心靈の波瀾は今如何に動搖しつゝありとするも、必ずやこの大潮流に向つて注入せられざるべからず、然りその一波一浪をして澎湃たる怒濤たるしむるものも、亦この時に於て奮然として起たざるべからざる也、嗚呼是れ大宗教育家大詩人大藝術家たるもの、一括せば彼等天才の士が双肩に擔ふべき快事にあらすや。

吾人不辛にして一度彼等の存在を否定したりき、况んや大天才の出現は望んで得べからず、彼れは招きて來らず、呼びて降らざる也、然りと雖も時勢よく英雄を作るとせば、誰れか精神的英雄なるもの、即ち天才なるものゝ今正に出現すべき秋なるを思はざるものあらむ、然らざすと雖も時なる

哉、一度葬られし彼等がやがて先鞭を振つて、吾人天才の出現を翹望する民衆の爲めに、或は一種精靈のバプテスマを施すを得む乎、彼等が光にあらざるは吾人の知悉せる所、然かも光につきて證あかしを作すを得ば、吾人が彼等に對して、感謝するところ、寔に多大なるを得む、吾人斯くの如きを望む、決して多きに過ぎざるべき也。

(六)

民衆の理想は掲げられたり、履の紐を解くにも足らずと雖も、誰れか天才の馬前に花々しき武士振を示さむを欲せざらむ、長蛇は天に上りて長しへに蛟龍たり、凡庸も亦斯くの如くにして天才たるを得ざるべきや、レツシング然り、ウヰンケルマン然り、而してその證の後に燦然として天の一方より出現せしの光は、即ちゲーテにあらずや、シルレンにあらずや。

是に於て乎吾人は國民文學の建設を思はざるを得ず、彼のレツシング一派の所謂國民文學とは、外國文教の束縛を脱して、空しくその傳播者たり、將た憧憬者たるの地位より、飄然として國家固有の精神を發揮し、國民自家の心靈を開發せしめ爲めに、文學を以て國民意識の根蒂を築きしものに外ならざる也、換言すれば自から時代の精神を變じ、民衆の理想を新たならしめしにあり、然れども吾れにありては必ずしも然らず、看よ民衆は醒めたり、理想は輝けり、只だ此の覺醒の後を承けて、理想の光明に向はしむべき捷徑を得ば足れる也、將た又一代の民衆がこの高遠なる理想を忘却して、その埒外に逸し去らむとするを扶掖するにあり、故によく當代民衆の要求と進路とを解して

「汝等の理想茲にあり」と告げ、民衆をして倦怠せしめず、挫折せしめず、驀然として進み、然も釋然として悟り、五千萬翁然として一大旗幟の下に集まるを得せしむるもの、換言すれば常に批評を怠らず、慰安を欲かさず、而して人生一切の生命を司るもの、是れ我が大和民族の國民文學に外ならざるべき也。斯くの如き國民文學の建設は、必ずしもウキソケルマンたり、ソツシンクたるを要せざるべきも、然かもその貢獻するところに至つては、未だ容易にその徑庭を判すべからざる也、誰か起つてこの鴻業の陣頭に立たずや。

翻つて考ふるに、世の所謂戦後の經營と稱せらるるもの、一事の緊要ならざるはなく、然かも容易なるはなし、財政の整理と云ひ、軍備の擴張と云ひ、將た又清韓の統御と云ふ、比々皆然り、然れども是れ等は困難なりと雖もその範圍に於て、その時間に於て、その方處に於て或は限るところあるに拘はらず、獨り我が所謂國民文學の建設に於ては、五千萬同胞が一局に偏せず一時に限られず、全精神を總括して孜孜拮々、永久へに確立せられざるべからざるものあり、而して極まる所は理想の實現にありとせば、是れ豈に戦後經營の至難にして、然かも至大なるものに非ずして何ぞや、然り心靈の問題は千載に亘りて始めて完成の域に入る、吾人必ずしも之れを眼前に致さむことを希ふものに非ざる也。

至大至難、全大和民族の心靈を包含して永劫に及ぶべきものを、眼前直ちに獲得せむことを望まずと雖も、然かも吾人は如上の要求を擲去し能はざる也、然らば更に求むるところ新たなるべし、是れ吾人が直ちに與へられむ事を切望する、唯一最後の要求たるべき也。

(七)

反動は萬物に普遍なり、回轉の機運は何處にかその鋒鉞を露はさずむば止まざらむとす、大戰の後を承けて、民衆吾れの存在を意識するや、新興の勢潮の如くに漲らむとして卓落の氣勃然抑ふべからざるものあるに當り、若し一絲の切々として響くものあらむか、萬管嘈々として之れに和するが如きは、蓋し必然の數たるべし、此の時に際し一縷の光明來りて之れに投するあらば、齊然として仰視し、靡然として之れに歸趨せむ、必ずしも明光と云はず、微光尙ば可なり、明光とは是れ國民文學建設の完成が發するところ、微光とは是れ國民文學建設の曙光に外ならざる也。

旭日は一刻にして天に冲せずと雖も、その漸く山頂を離るゝの微光は、仰いで以てその明光を憧憬するの對象とせらるゝに非ずや、國民文學建設の光とは、そが完成の域に入る努力たり、前提たり、發足たるものにして、是れ宗教文藝の士が宰乎たる意力と熱誠と信念とを以て、建設に向ふの利那に於て發するものに外ならざる也。故に吾人は斷じて曰く、國民文學建設の曙光は、五千萬民衆があらゆる要求の源泉にして、これが發揮につとむる宗教文藝の士は、即ち天才の證をなすもの、是れその本務にして又た光榮なりと。希くは國立劇場の建築も、帝國大學の獨立も、將た又早稻文學の再興も、總て此の曙光たるに近からしめよ。

願れば千嶽萬峯瓦然として破れ、黒雲紅熱噴然として乱れしは、悠久過去の面影となりぬ、感激の極点に達して吾れを忘れし民衆は、今や自家將來の面影を光明の裡に見出さむとす、宿雨新たに晴

れて、天日の照々たるを望むこと切なるにも似たり、理想の明光は俄かに實現し難しと雖も、之れが最初の微光を仰がむは即ち滿腔の願ひなり、之れに應じて起るべきもの即ち國民文學の曙光にして、一代の宗教文藝を司るものは、先づ以てこの高潮に棹さゝざるべからざる也、繰り返へす、國民文學建設の曙光は、大和民族が存在の爲めに理想の爲めに、人生に向つて發する第一箭也と。

(明治三十九年一月三十一日稿)

